

幻虎録



陶 易 王

胸が苦しい。何かしら重いものが乗っている。

首をもたげてみると、毛むくじやらの太い手が乗っている。猫の手にしては大きい。

大きいと思ったら、生臭い息が顔にかかって、へろへろと舐められた。

きょっとして見るとこれは虎ではないか。いじりこる喉をならして顔を擦り付けてくる所は大きな猫である。舌がざらざら触れて猫みたいだが、虎に間違いは無い。

生意はなさそうだが、どうして虎がこんな所に居るのか。死んだふりをすればいいか？

だが恐ろしい。急に気が変わって嘔み付いたらどうしよう。じっとして立ち去るのを待とう。と、風もないのに裏庭の笹数が、がさがさ動いた。そしてキュウキュウ鳴き声が出て、小さな子虎が二匹這い出して来た。母虎

を認めるとまっすぐ走って来た。

一匹がすぐ腹の下に入り込んで、乳に吸い付いた。もう一匹が何を思ったのか私の胸に乗り、鼻で寝間着を掻き分けて私の乳首に吸いついて、出る筈が無い乳をちゅうちゅう吸い始めた。

痛い。おまけに両手で胸を押し、交互に乳もみをする。くすぐったくて痛いから、手を伸ばして下から子虎を持ち上げると、後ろ足でぼんぼんと蹴る。子猫と同じである。

虎から逃れるチャンスをつかがっていると、遠くの裏山の寺で鐘がボーンと九回鳴った。

虎はむっくり起き上がり大きな欠伸をすると、山に向かつてのそのそ歩き出した。

乳を吸っていた子虎はお腹からころころ振り落とされ、後ろをひよこひよことしてゆく。

ほっとして起き上がるうとしたが、金縛りにあつたみたいに動けない。

その時、山の上から鐘の音が聞こえて眼が覚めて、思い出した。

寺の住職が飼っていた虎が山に逃げ込んだと言つ事件があった。あの虎に違いない。

ベッドから落ち、すっかり眼が覚めて思った。幻の虎は生きていたのだ。

(一)